

43
377

素軒逸史著

救之門

明治廿五年一月

福音社發兌

020858-000-1

特16-482

救之門

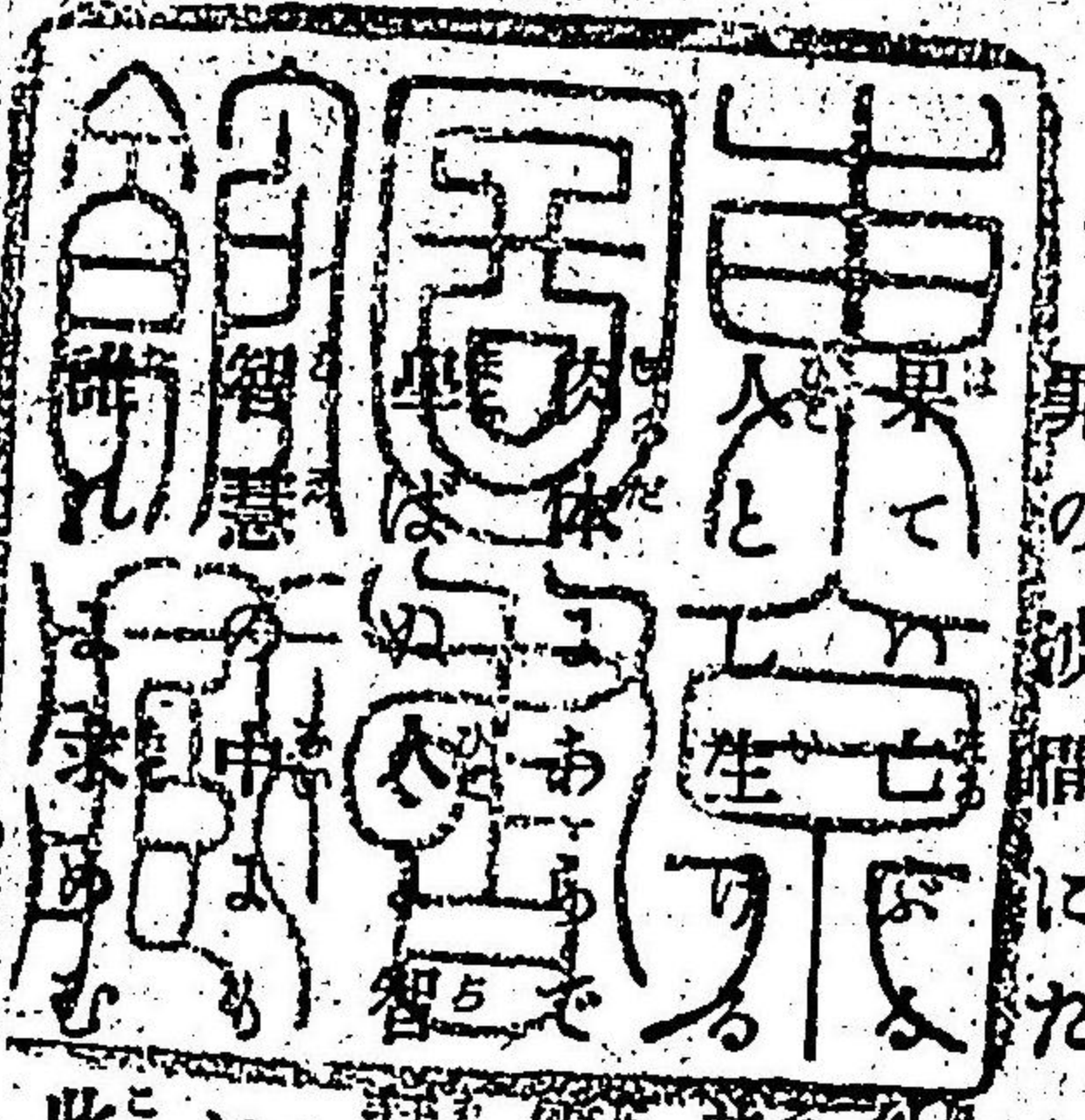
村田勤／著

M25

ABI-0689



來れ世の人此門よ



又命ぞと宣ひし
尋ねて行くの外はなし
生命の道茲に在り

救の門にとく來れ



淨きつ沈みつ死の
アフレ世の人とく
外面よあらで内部に在り
磨かぬ玉よ光なし
救の道を知る事が
尊き智慧と云ふべけれ
我の道を真なり
イエスキリスト神の子を
來れ世の人とく來れ
救の門に開けたり

目録

第一章 人生の快樂何處に在りや

第二章 耶穌教の万民の道

第三章 基督の救の門

救之門

第一章 人生の快樂何處に在りや

それ人ハ既に草の如ク其榮ハ凡ての草の花の如シ草ハ枯レ花ハ落ツ然レ主の道ハ窮リなく存ツナリ爾曹に宣傳る福音ハ乃チ此道ナリ

救之門

我ハ何の爲メ此世に生れ來りしや我ハ何を爲して一生を送るべきや又我靈魂ハ死後何處へ行くべきものなるや凡そ人とし生けるもの、當メ究むべき問題あり、嗚々の一聲由りて母の胎内を出來り、襁褓の中ニ在りて東西を分ち得ざると一年あまり、物欲しき時の泣き、氣入らぬ事あれハ泣き、痛さも痒さも泣きて知らずの外なき時を経て二

救之門

三才の頃よなれば、手も少し自由、働きはじめ、足も歩歩く
よ堪ゆるやうにあり、程経て幼稚園を通ひ、小学校に入り、普
通の學問を脩めて、年頃よなれば、商買ありつくか、職業を
見習ふか、但、教員とあり、官吏とあり、會社の役人となりて
一家糊口の道を立て、花よ月よと云ふ中よ冬を送り、春を迎
へ、門松の冥土の旅の一里塚、知らぬひまよ齡重なりて、雪の
將よ頭髮を染めんとするを覺えず、年波の寄せ來るよ隨ひ
て來世の事が案じられ、死と云ふ聲が怖くなり、若い時分よ
は宗教よ無頓着なりし人々も、ヤレ今日は墓よ詣で、明日
は孫伴れて、觀音參りせむ、來年は六十一の賀を幸ひ、今一度
伊勢の大宮よ參詣せむなど、明けても暮れても、神佛の信
心を此上なき事と思ふが常あり、幼けあき時は眠むるが如

救之門

く、少き時は遊戯よ耽り、長すれば汲々として一家糊口の計
よ追はれ、老いての憂き事のみぞ多かりける、左れば人生の
快樂は何處に在りや、
世に大切なものは澤山あれど、生命に換ゆべき寶なし、家藏
も大事なり、金銀も大切なり、去りとして命あくは黄金の山も
何かせむ、盲者よは菊五郎團十郎の芝居も面白味なし、芝居
の上手を見て面白しと思ふの目あればこそ、酒池肉林の樂
も命ありての事よあむ、秦の始皇帝の巍峨たる安房宮を建
て、其中に三千の美姬を舞ひしめ己が情慾を恣よせしむ、
不死の薬の遂よ得られず、本朝の豊臣秀吉の匹夫の身より
起り、終に日本六十餘州を一統して、位人臣の榮を極めしも、
あよはのことの夢の世の中

救之門

と云ひて果たり、又儒林よ其人ありと聞へたる貝原益軒も
こしかたは一夜ばかりの心地して八十路あまりの夢を
見しかた
と詠じて終りぬ、サテ此世の如何なる世なるや、悲の世
か、將た喜の世か、人は何が故よ万物の靈長と稱へられしぞ、
人よして牛馬の勞働を爲すものあり、而して其力や之よ及
ばず、空飛ぶ鳥の飢へて死しを見ず、而るよ人よの之あり、
犬猫と雖も其子を棄つるものあるを聞かず、而るよ世よの
其人あり、ア、世の憂きものかな、人の憐あるものかあ、奢る
ものは久しからず、只夏の夜の夢の如く、猛き人も遂よの滅
びぬ、偏へよ風の前の燈よ似たりと、昔しの人と言ひしも宜
なり、富めるもの、貧しきもの、飛鳥を落せし名將も、閉花羞月

救之門

の佳人も、果ての一ツの墳墓の中、サヲバ、チサヲバ、イザサヲ
バ、墳墓が此世の終なら、人生の夢か幻か、伯夷叔齊の義を守
りしも、天之を助けず、盜跖の大悪を行ふて壽命を了へたり、
楠家の一族の忠義の爲よ討死せしよ南風終よ競はず、足利
尊氏の賊軍となりて子々孫々、十五代の榮華を盡せり、實よ
此世の顛倒よて天道の是非定め難し、左れば人生第一の目
的の榮耀榮華を極むるよ在り、虚言をついていも、義理人情
を外れていも、金を利けたものが勝あり、人生五十若い時が
何時まであるか、學問をして小理窟をあらべ立たとて、天道
様が動くとも、地球が回轉とも、店の賣高に何の差異がある、
兎よも角よも、錢金を澤山利け、家藏を立派よ建てあらべ、家
内安全商賣繁昌、春の花見、秋の紅葉がり、一年數度の芝居見

救之門

物好きき酒を足るほど飲み、氣に入つた妻を何人でも抱へ、
 勝手に樂して世を送るが一番の智者と云ふべけれど、利口
 そらよ人生の極意を説法するもの、何を唯墨染の法衣を着
 たる腥坊主のみならむや、滔々たる世人多く、此宗の門徒
 に非ざるのあし、彼等の經文を聞けば乃ち曰く、
 飲めや躍れや明日の命も定かならぬバ
 一休和尚悟道の歌よ
 世の中の食ふてはこして寝て起きてさて其後の死ぬる
 ばかりぞ
 然るに天より聲ありて云ふ
 汝たとひ全世界を得るとも若し其命を失はば何の益あ
 らむや

救之門

凡て疲れたるもの又重さを負へるもの、我よ來れ我汝
 等を息せじ
 我の世の光なり
 我の命のパンなり
 我の道なり眞なり命あり
 と異なる哉此語人もし此聲の出でし處を知らまく欲せば
 來りて聖書を學ぶべし

第二章 耶蘇教ハ万民の道

是故に爾曹ゆきて萬國の民にバナテスマを施し之を父と子と
 聖靈の名に入て弟子とし且わが凡て爾曹に命せし言を守れと
 彼等に教よ夫われの世の末まで常に爾等と偕に在なりアーメン

救之門

扱耶蘇教がはじめて我邦に渡來せしは今を去ること三百七拾餘年前の事なり、信長の如きも一時之を賛成し京都に南蠻寺と云へるものを建てしめしは悉なりし、秀吉家康の輩の大よ之を忌み嫌ひて嚴禁の沙汰に及べり、嶋原天草の亂に耶蘇教徒の加擔せしものありしより、幕府の愈々此教を邪宗門と認め、悉く宣教師を追拂ひ、其門徒を酷刑に處し、海外との交通を嚴にし、剩へ五百石以上の大船を造る事を禁じ、人民は是非共佛教に歸依せしめ、生死婚嫁等の事に至るまで一々寺僧の証印を取らしむるに至れり、是より先宣教師の我邦に密航するもの多く、我國よても諸侯より私かよ使者を羅馬に遣はせしものさへありしは悉に、當時信徒の數の實に萬を以て算ふるに至りしとぞ、徳川氏が耶蘇

救之門

教を嫌忌するの甚しき之を刑するも或の火刑を以てし、或の磔殺を以てし、又畜に成年の男女のみを止めず、頑是なき幼童、爲すなきの媪翁と雖も一々之を戮して容す所なかりき、當時の人素より法理を暗く、政府の罰する者の皆是惡人ならんと思ひ、遂に其名をさへ憎み至りしも尤の次第なり、又其頃よりありての我國人の智識頗る幼稚なりしは西洋諸國よての最早近代文明の曙とも謂ふべき時代なりしかば、彼の利器工藝を取て俄かよ我未文の民に示さば、之を視て魔法妖術を行ふものと思ひし事も無理からぬ次第なるべし、況して其教の支那印度よりも遙き國に行はる、教なり、その禮拜する所の目標のキリストの十字架なり、其讀む所の書の異國の文字あるに於てをや、かくて子々孫々言

救之門

ひ傳へ聞慣れて今日に至りし事故、耶穌と聞けり直に邪宗門と思ひ、基督と云へば即ち磔殺ぞと恐れ、一も二も此宗旨の怖いもの、イヤナものと云ふ感情を生せしむる合圖語のやうになり來しも全く其由來あしとせざるなり、世間去りながら今の明治の聖代なり、慶長の昔に非ず、文明の太陽既に東天より昇り、開化の花到る處は咲き揃へり、昔の異國の人を視れば夷と云ひ、毛唐人と罵りて殆ど人間は非ざるもの、如く卑しめしめ、開港後に至りての文學、工藝、智慧、學問、何れも由らず外國の方が我邦に立優りて進歩せる事を發見してより、一瞬千里の電信を輸入し、飛龍走蛟の汽車、汽船を輸入し、政体も彼より取り、法律も彼より學び、建築も彼より倣

救之門

ひ服装も彼より模し、昔の唐本を床の間で据ゑ置きし學者先生も今の英と佛と獨逸と、何れも金字入の簞行書を弄ぶに非ざれば學者らしく人も見す吾も思ひぬ世となりぬ、羽織袴お髻を戴き扇バチで正月の禮は廻ると何となく愚物のやうと思ひぬ、八字髭に黒の高帽で靴音高く出掛けるときは自ら開化人の如く見られて丁稚や番頭の挨拶さへいと鄭重なり、一寸買物も往きてもモ少し上等のさいか舶來のなにかなど云ふて西洋品の即ち上等ありとまで心得るに至れり、斯の如く三十年前までの夷と呼び毛唐人と罵りたる外國人こそ却て我に立優りたる人民にして、國強く兵多く、黄金も澤山あり、仁義の道をも辨へ居るものと知れてより、漸く西洋風が盛んは吹き入りぬ、中よのま、

救之門

西洋嫌ひの人もあれど畏くも天皇陛下さへ洋服を召させ
給ひ立憲の政度を裁可し給ふ御代となり、制度文物靡然と
して泰西の風に從ふ氣運となり、北の青森より南の熊本よ
至る迄、汽笛の聲、曉々として響き渡る世の中となり、坊主も
神官も洋服シヤツポで奔走する時代とありて、最早此大
勢を如何ともする可らず、又するの必要あり、唯々彼の長を
取りて我短を補ふを以て智者の所爲となすべき也、便利な
るもの、故に先づ物の便不便、事の善惡、理の曲直を質て之より從ふ
べし、何ぞその洋の東西を別たむや、事理固り然らば、則
ち獨り耶穌教より於てのみ無暗に之を嫌ひ之を疎んずべき
の理あらんや、耶穌素より東洋の國より生る、左れども日本人

救之門

非ず、釋迦素より東洋の人なり、左れど日本人非ず、佛教
の今より千三百年前に百濟より渡來し、耶穌教の今より三
百數十年前羅馬より渡來せり、渡來の時、先後ある故を以
て一の外教なり、他の外教に非ずと云ふを得べき乎、夫れ
佛教の東洋より發して東洋より止まる、耶穌教の猶太の小國より
發して今や五大洲に渉る、耶穌教の英國人の宗教より非ず、佛
國人の宗教より非ず、獨逸人の宗教より非ず、又米人の宗教より非
ず、人類の宗教あり、世界の宗教なり、宇宙の眞理あり、

第三章 キリストハ救の門

それ神ハその生みたまへる獨子を賜ふはをに世の人を愛し給
へりては凡て彼を信するものに亡るゑなくして永生を受けし

救之門

めんが爲なり神のその子を世に遣ひし給へるの世の罪を定めんとに非ず彼に由りて世を救はんが爲なり彼を信するもの罪に定められず信せざるもの既に其罪定まれりその神の生み給へる獨子の名を信せざるに因る

世の人謂へらく凡そ宗教の人類の信奉すべきもの相違なし、西洋の人多く、の基督教を奉じ東洋の民多くの佛教より歸依そ、東洋と西洋との人情風俗相同からず、宗教の上よも多少の差異ある事固より其所なり、何ぞ西洋の人よ佛教を信せしむるの必要あらむや、又何ぞ東洋の民に耶穌教を奉せしむるを用ひむや、且夫れ宗教の旨意とする所の勸善懲惡よあり安心立命よ在り此点よ於ての耶佛兩つあがら異なるとなかるべし、左れば耶穌宗の人々が愛を勸むるも和

救之門

尙が慈悲を説法するも、極る所は一轍なり、キリスト教よて窮なき命と云ふも佛教にて無量壽と云ふも、左のみ異なるとなかるべし、故に先祖代々信奉し來りたる佛教を捨て、故らよ耳新らしき基督教よ從ふの無用ありと、

是れ一應尤もらしき話なれども能く考ふるとき甚しき了簡違と謂ふべし、たとへば星も光なり、提灯も光なり、月も光なり、日も光なり、夫故よ月と日との同様也、星と提灯との親類ありと云ふが如し、三才の兒童と雖も豈その愚を笑はざらむや、況して白晝よ戸を閉ち行燈を点して、我すよ此燈あり、何ぞ故らに太陽の光を借るを要せむやと云ふものあらば、誰れ抱腹絶倒せざらむや、夫れ基督教の太陽の如く、佛教の月の如し、太陽の未だ出でざる中の月皎々とし

救之門

て冴る渡り人皆其光より由りて遠近の景色を眺め又其光より由りて歩行し得べし左れども一朝赫灼たる太陽の密雲を排きて東天に昇り來るとき月のみ只ボンヤリとして其淡き姿を天の一方に残すべきのみ基督の世の光なり全世界の光なり全人類の光なり太陽の光熱に由りて万物の生々發育するが如くキリストの恵と眞よりて人の靈魂の再生し得べし
今一人あり誤て池はまり將水は溺れんとす一士之を見て惻隱の状を爲し諄々乎として教へて曰く汝聞かずや君子の危きよ近よらずと汝もし本道を歩み來らば此禍なかるべかりしよ去ればとて今詮すべなし過ちて改むるは憚ると勿れ宜しく而手よて水をかき此岸に泳ぎつくべ

救之門

し然らば吾孺子よ正道を示さむ又一僧あり之を憐み手を延べて救のんと欲するも手達かず彼此する中溺者哀泣して氣息將に斷へなんとす僧遂に歎じて曰く是れ汝が前世よての因果からん願くば六字の妙言を唱へて安らかよ成佛せよと又一人あり池中よ人の聲あるを怪み馳せ來りて之を見るよ、ユハソモイカニ我同胞なり直よ衣を脱ぎ水よ入て之を救へり
讀者の既よ察知せられしなるべし始め來りし一士との儒教よ比したるなり次よ來りし僧の佛教の譬なり最後の一人の基督教の譬なり即ち天父が人類が罪惡の中よ沈溺んとするを憐みその獨の愛子なるイエスキリストを世に降して救の道を立しめ玉ひし事の基督教の大旨意なり

救之門

夫れ孔子や孟子が説きし仁義忠孝の教の固より善き教も
相違あし、基督も亦仁義を説けり、君臣義あり、父子親あり、夫
婦別あり、長幼序あり、朋友信ありの五常の道の固より善き
道なり、基督教も亦之を勸む、聖書曰く
靈の結ぶ所の果の仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、
擗節、斯の如き類を禁する律法のある事なし
と左れば道德の一面より見るとき其説く所大なる差異
あるとなし、耶穌教とて少しも不思議なる事をせよと勸む
るに非ず、シカシ如何に立派なる道德の模範を置くとも
人として之を行ひ得ざるとき何の益あらんや、人として
人の人たる所以を悟り、人の人たる道を行ひ得たらんよ
釋迦ありとて何かせむ、上帝も亦基督を降し給ひざりしな

救之門

らひ然れども憐むべし人は既に天道よ背き利へ人倫を失
へり心の目既よ盲せり、心の足既よ跛あり、盲者よ命じて汝
もし目を開かば彼の高き山を見得べく、又此美のしき花を
眺め得べしと云ふとも、彼の唯蒲山しく思はんのみ、其目依
然として見へざるなり、跛者よ向ひて立てよ、汝もし立ちな
ばかく愉快く歩行し得べしと告ぐるとも、彼能立たじや、更
よ手近き壁を引きて云はんよ、酒に迷ひ、色に狂ひて親より
勸當せられ、昔し親の家よ在りし頃の衣食よ何の不自由も
覺えざりし身の、今の全く零落て乞食同様の姿となりはて、
シカモ身体よ悪疾を受たる少年よ向ひ、御身の何故よ父の
宅に歸らざるや、家よ奴婢多く、衣食調度に差支なきもの
をと云へばとて此少年いかで父の面前よ出づる事を能く

救之門

せんや、左れども茲よいと親切なる一人の朋友ありて彼を
吾家につれかへり、先づ名醫を請ふて身の病毒を去らしめ、
屢しく従來の悪事を改めしめ、病癒へたる後、吉日を為らび、
新衣を着し、其友の紹介に由りて父の家へ往き、幾重も不
孝の罪を詫びたる上、親の怒も解けなば、此少年もはじめて
再生の思あるべし、
夫れ斯の如く人たるもの始めの神の子供にして、万物の靈
長と爲されしが、年月を経るに隨ひ、邪念其心より生じて罪の
上に罪を重ね、悪の中に悪を行ひ、遂に父の神より離れ、天の
與へし良き性質のやうやく薄らぎ、自ら積みし悪念邪情の
結びて性となり、善を爲すの阪は車を推すよりも難く、悪に
陥るの水の低きよ就くよりも易く、幼けなかりし時おの、花

救之門

よ玉よと愛で育てし我子さへ大きくなりて、父母の恩義
よ背き、親類朋友に迷惑をかけ、果ては邪悪の人となる、中よ
は君子と呼ばれ、仁者と稱せられて、道德高きが如く見ゆる
人もあれど、細かよその一生の心事を閲みし來るとき、誰
れか全く罪より免がれしものあらじや、實は罪の絆の鉄鎖
よりも強し、神より離れ、罪に染み、日夜良心の鋒に刺され、
ら世を渡る人いかで其心よ安きを得じや、心安からざる人
相聚りて家を成さば、其家如何で樂しからじや、ア、安心立
命の基の罪より救はる、に在り、悪より自由よせらる、よ
在り、蓋し罪惡よ擒よせらる、の水よ溺る、よりも苦し、大
聖と仰がる、孔子すらかく云へり
義を見て移る能はず、不善改むる能はず、是れ吾愛あり

救 之 門

基督の高弟も亦云へらく
 吾願ふ所の善の之を行はず、
 行へり、若し吾願のざる所を行ふときは、
 吾よ非ず、吾に居る所の罪あり、
 死の体より吾を救はんもの誰ぞや、
 と大聖人として其言斯の如し、
 をや、ア、万人今や罪の淵に落ちて救を呼べり、
 らひや、神豈情なからひや、
 其獨愛子イエスキリストを世に降して、
 中より救ひ出し玉へり、
 吾罪を悔改め、
 人此門に救の門の開けたり

明治廿五年一月四日印刷
 明治廿五年一月五日出版

發行者 今村謙吉

著者 村田勤

印刷者 岡本藤五郎

發行所 福音社

大阪市西區土佐堀三丁目
 卅八番屋敷

京都市上京區堺町夷川下ル
 卅三番月

大阪市北區老松町二丁目
 百三十七番屋敷

大阪市西區土佐堀三丁目

DF 32